

古代国家の成立

山口大学教育学部付属光中学校 加藤 浩久

1

新指導要領と本単元

新しい学習指導要領では、時代区分の取り方が大きく変わった。この改訂を利用すれば、生徒の歴史観を豊かにさせるための授業の構成が可能になる。

なぜなら、新しい時代区分は、総じて時間の幅が長く、そこで展開される事象の特色を総合させることによって、一つのまとまりをもった時代として生徒が意識できるようになるからである。

本稿では、古代国家成立までの日本を例に、その単元構成の工夫について述べていく。

2

本単元の特徴

(1) 課題解決的な学習の流れに慣れさせる

本単元の導入的な学習課題として「どうして聖徳太子は、隋に使いを送ったのか」を設定した。

この課題追究の過程を通して、生徒には、歴史学習を進めていく上で必要となる学び方を獲得させることができるだけでなく、古代国家成立までの日本統一の過程を大観させることが可能になると考えている。

この課題を解決するためには、次のテーマを設定して、古代国家成立前の日本社会や、東アジア世界を追究することになると考えている。

- ・聖徳太子は、どのような外交上の問題に直面していたか。
- ・聖徳太子は、どのような内政上の問題に直面していたか。
- ・過去に中国に使者を派遣したことはなかったか、あったとしたらそれはどのような背景のもとに行われてきたか。

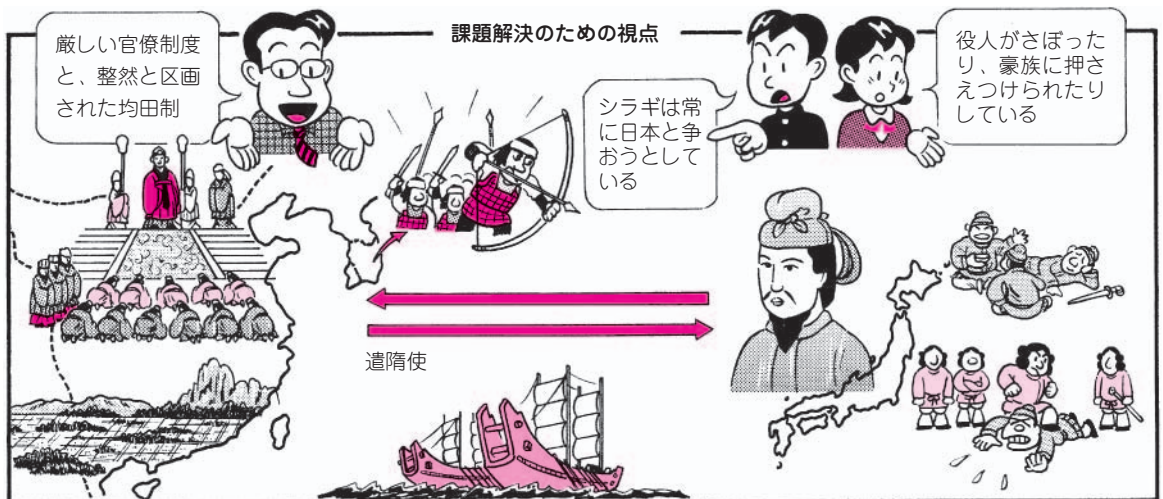
(2) 一つの視点から歴史をさかのぼらせることによって、学習内容の厳選を図る

「歴史の流れと地域の歴史」の学習の直後、通史学習における最初の単元としてこの課題に取り組ませる。聖徳太子以前に、中国に使者を送った例と比較させることによって、日本が一つの国として統一されていった流れがわかる。

この課題を通して学ばせることが無理な内容に関しては、特設単元を設定して行う。

(3) 聖徳太子の行為を通して背景となる世界史を大観させる

歴史的分野の学習では、世界史を背景とした単元構成を行うことが義務づけられている。本単元の課題を追究することを通して、生徒は機械的ではなく、目的意識をもって聖徳太子の諸政策の背景にある東アジア社会に対してアプローチすることになる。



3

単元構成上の配慮

(1) 古代全体を一つの時代としてとらえさせる

新指導要領の主旨を生かすためにも、「飛鳥時代」「奈良時代」「平安時代」という現行の単元構成は避ける。次のような視点を定めて、できるだけ長いスパンに注目しながら古代全体を意識させる。

「墾田永年私財法で認められた土地の私有はどう展開したか」

「大宝律令で定められた税制は、どのように変化していったのか」

(2) 人物に注目しながら考察させる

本単元は、中学校に入学して初めての単元でもあるので、人物に注目した考察も積極的に肯定す

る。聖徳太子、中大兄皇子、蘇我入鹿、藤原道長などは、生徒が目出しがちな人物である。しかし、あくまでも社会科学習のねらいは、生徒に学習対象を社会として認識させることにあるので、その後の働きかけによって、人物を通して社会を意識させるようにする。

(3) 単元の特徴を考察させる過程を設ける

歴史的分野の単元構成においては、まず単元の前めに時代の特徴を予想させ、単元の終わりにはそれまでの学習をふまえて特徴をまとめるという活動を設定する。

本単元では、当然学習対象である古代という時代の特徴を考えさせる。生徒にとっては初めての体験なので、高度な内容は期待してはいけない。しかし、このような学習を中世、近世、近・現代とを繰り返していく内に次第に生徒は、特徴のま

「古代の日本」単元構成

	題材名	おもな学習活動
1	古代以前の日本	これから学習する古代までの日本を年表などを通して大観する学習を通して、古代という時代における日本の特徴を予想する。
2	7世紀前半の日本と東アジア	聖徳太子の業績にまつわる学習課題である聖徳太子は、どうして隋に遣いを送ったのか」を通して、古代までの日本社会に対して関心を高めるとともに、今後の課題解決に向けての見通しを立てる。
3	聖徳太子をめぐる内政問題	十七条の憲法や、冠位十二階を検討することを通して、聖徳太子が直面していた内政問題に気づく。
4	聖徳太子をめぐる外交問題	朝鮮半島の鉄の利権の獲得という問題を通して、当時の東アジアをめぐる国際関係を理解する。
5	過去に中国へ使いを送った為政者たち	過去に中国へ使いを送った例を考察することを通して、日本が中国大陸へ使いを送ることの意味を調べる。
6	ムラからクニへ	日本が、ムラからクニへと統一されていく様子を、農耕の開始から検討する。6世紀までには、かなり強力な王権が出現していたことを古墳を通して理解する。
7	隋という国	均田制や科挙などの制度を検討することを通して、聖徳太子を引きつけた様々な魅力を明らかにする。古代までに、中国大陸や朝鮮半島から日本に伝わってきたものをまとめる。
8	大化の改新	大化の改新改心の詔を検討することを通して、新政府がめざした国づくりの方針を読みとる。
9	大化の改新後の中国との関係	白村江の戦いや遣唐使などの考察を通して、日本の中国との関係を明らかにする。大化の改新後の動きを考察することを通して、日本の国際的地位の向上について言及することができる。
10	大宝律令	大宝律令を検討することを通して、中央集権国家としての日本の体裁を確認する。
11	仏教と日本の政治	聖徳太子以後の日本の為政者と仏教徒の関係を考察することを通して、古代国家の変化を確認する。
12	律令政治の変化	摂関政治のメカニズムを検討することを通して、律令国家の変質を理解する。私有地の発生や、不輸の権の承認などを考察することを通して、律令国家の変質を理解する。。
13	古代日本の文化	古代日本の文化を検討することを通して、仏教や大陸の影響を中心としたその特徴を理解する。大陸と交渉を断っていた時期の日本の文化の特徴を理解する。
14	古代日本の特徴	これまで学習した内容をもとに、古代日本の特徴をまとめることを通して、これまで学習してきた内容を再構成するとともに、今後の学習に対する課題を意識する。

とめ方にも習熟してくると思われる。

また、中世の特色をまとめた後に、古代の特色をまとめ直したり、近世の特色をまとめた後に、再び古代の特色について考えさせるという往復と重複のある単元構成を行うことも考えられる。



4 授業の実際と考察

(1) 古代日本成立期における学習

① 聖徳太子の内政上の課題

十七条の憲法の条文を読むと、生徒が直面する内政上の課題が明らかになる。

過去に、中国に使いを送った為政者は、必ず内外に強力なライバルが現れたときに、中国の権威にすぎることが目的に使いを送っている。それを仮説に聖徳太子の時代を推測させることによって、生徒はさまざまな発見をしていった。

② 聖徳太子の外交上の課題

聖徳太子が実質的な権力を握るまでの間、朝鮮半島では、鉄の利権をめぐるさまざまな争いが展開されていた。先ほどの仮説を適用するとすれば、この問題をめぐってのライバルとの争いを有利にするために、隋を味方につけようとしたと考えることもできる。このような発想に基づいて生徒は、新羅との関係に注目していった。

③ 中国という国がもつ価値に注目させる

聖徳太子が中国に使いを送った理由として、生徒が真っ先に挙げるのが、「文化を取り入れる」という目的である。しかし、課題の解明にとって重要なのは、この文化の中味である。

仏像や寺の作り方、壁画の描き方も興味の対象だったかも知れない。しかし、氏姓制度化の豪族の圧力に苦しんだであろう聖徳太子にとって、中国の官僚制度は魅力あるものとして映ったかも知れないという仮説に、生徒は傾いていった。

(2) 単元後半の展開

① 古代国家の崩壊に関して

単元の学習が進んでくると、古代国家がどのように崩壊していったかに興味が集まる。摂関政治に代表される律令政治の変質は、大化改新によって力を奪われた貴族（豪族）の側からの逆襲ととらえる生徒もあらわれた。

② 日本の国際的地位の向上に関して

聖徳太子は、日本の社会的地位を向上させた人物として有名である。しかし、日本の国際的地位は、周辺諸国との関係のもち方によって、少しずつ変化していったことを忘れてはならない。白村江の戦いやその後の遣唐使の活動も、日本の国際的地位に影響を与える大きな要素であった。

また、中世の現行や倭寇なども、日本の国際的地位に大きな影響を与えたはずである。「倭」から「日本」へと変わっていくためには、この国際的地位の向上は不可欠である。

③ 社会構造の特色に関して

当時の社会構造の中では、比較的下層とされていた武士という階級が次の次代を担うことになる。近世の社会構造で比較的下層におかれた商人たちが、近代以降は、社会を支える存在に成長している。

このように、時代の変わり目に注目することによって、一人ひとりの歴史観を豊かにできる。